

の子実体を直出し柄は 2.5 匁程の長さで白色、頭部は円柱状で長さ 1.4 匁、淡黄色、表面は被子器の孔部が少しく突出し粘性が強い。被子器はセミタケに似て埋生、未熟である。恐らく近い将来に我國でもこの子嚢型が見出されることと思われ、その場合接種試験により子嚢型と分生子型であるクモダケとの関係を明らかにする機会が與へられることであらう。

○我が所蔵の「植物名実図考」について “伊藤圭介翁がもっていた「植物名実図考」が嘗て神田神保町の山本書店に出ていたので、大分高いとは思ったが買つておいた。この書物は「名実図考」が未だ我邦に一部位しかない時分に、伊藤翁が何とかしてこれを見たいと思つて、燕京の役に従軍したある独乙人に頼んで、明治 16 年頃入手したものであつた。したがつてこの書物こそ日本に入つた極く初の「植物名実図考」である。元刷でなかなかきれいであり、私はこれを誇りとしている。”

○チマキザサの變化 “越中の立山に行くとチマキザサ (*Sasa paniculata*) と思うもので一杯でこれがずつと上までつづいて、次第に小さく遂にハイマツの所まで行く。稈は針金のように細くなり高さも低いし、葉もずつと短い。しかしやはり *Sasa paniculata* 型である。標本にすると下のとは一緒には思ひまいが連続してみるとわかる。中國地方にもネマガリ (*S. kurilensis*) がたくさんある。これは千島から南にくるに従つて段々に大きくなつてゐるものだ。山の中に小屋を立てるために刈ると小さい奴がたくさんに生えて来てまるでちがつて見える。刈ればいくらでも小さくなる。植木やのクマザサも同じ式のもので植えてみればクマザサになつた。”

○アコダウリ “京都の北村君からきいたが北野神社の籬にカボチャの彫刻があるそうだ。のつぺらで靱しや色だという。この神社は慶長 13 年のものだから、これはその当時のものをうつしたと思われるから多分アコダウリだろう。そして当時食べたろう。明治になつてから東京でもアコダウリを見たが、丸味があつて色はオレンジの赤いようなものであつた。”

○スグキナ “京都の郊外に前から植えている所を見て来た。三度も行つたよ。古いことをよく知つたお百姓さんがいてそれからいろいろと話をきいた。今のスグキナは近江カブともとのスグキナの間種だと思う。この人も先年死に、種子もなくなつてしまつたと北村君からきいたが惜しいことをしたものだ。こんな様な古いものは暇にあかしてさがすよと思う。”

(牧野先生一夕話 XII-XV—文責在編輯)

後記:—論文の末尾に挿入した短文は編輯同人が牧野先生から直接伺つた話をメモにとつてあつた中から拾つてのせました。片言隻句の中にも、そのまましておくのが惜しいと思うものがあつたからです。間違いのないよう気はつけましたが、もし万一間違いがあつた時は我々の誤記であることを申し添えます。(前川文夫、原寛、津山尙)